

第11話 星は見ている



古びた時計が午前一時をさしていた。

(でも)とアヤノは思う。(いまは一時じゃない。一時を過ぎて——本当は何時だろう?)

ポケットから携帯電話をとり出せばわかることだったが、アヤノは自分が夢を見ているのではないかと思っていたので、正しい時間が何時であるかはどうでもよくなっていた。この店の店主であるイバラギさんが云うには、(一台で正しい時計)が示している時間が正しい時間ということになるのだけれど、それも本当かどうかわからない。なにしろ、自分はいま夢の中なのだから——。

「あの」とアヤノは夢から覚めたときに悔いながらもこらないよう、思いついたことをすべて実行することにした。

「あの、その階段は売りものなんですよね」

「ええ、もちろん」とイバラギは答えながら、ほんのわずかばかりの困惑を眉まゆと眉まゆのあいだに刻ん

でいた。

「もちろん売りものなのですが、まだ名前をつけていないのです」

「では、いますぐつけてください」

アヤノは普段であれば、そんな無理強いはしないのに、躊躇ちゆうちよする自分を解放して、思いつくまま言葉にしていた。

「名前がついたら、わたし、それを買います」

「本当ですか？」

こうなってくると、イバラギもまた自分は夢を見ているのではないかと自らを訝いぶかしんだが、夢であれ何であれ、いずれにしても、ちやうどその階段に名前をつけようとしていたところだったので、

「わかりました」

と十秒ほど目を閉じた。これがイバラギのやり方である。目を閉じて、最初に浮かんだ言葉をまずは採用する。

「あと何段？」

イバラギは自分に向けてなのか、それともアヤ

ノに向けてなのか、誰かに問いかけるようにそう云うと、「そうだ」と大きく頷いて、

「決まりました」

と目をあげた。

「この商品は、一段一段、名前が違うのです。下の段から順に番号が振ってありますからね。全部で十四段。ですから、十二段目は〈二階まであと三段〉、これがこの踏み板の名前です。当然、十三段目は〈二階まであと二段〉。十四段目は〈二階まであと一段〉です。どうでしょう？　どれがお好みですか」

イバラギがそう云うと、アヤノも一瞬、目を閉じて考えようとしたが、目をあげたときに夢から覚めてしまうのではないかと気づいて、「わたしは、あの」と早口で話し始めた。

「もう、ずいぶんと長いことのぼってきたんです」

「階段をですか？」

イバラギはアヤノが何を云っているのかわからないので、そう応えるしかない。

「そうですね——階段のようなものです。階段をのぼって、二階というか——次のところへ行きたくて、もう長いこと」

「そうでしたか」

「わたし、ずっと気になっている男のひとがいるんです」

「え」とイバラギは小さく声をあげ、と同時に、うずき始めたけんしょうえん腱鞘炎をいたわるように親指のつけ根を撫でさすった。

「結論が出ないまま時間が経ってしまつて——でも、つい最近、あたらしい展開があつて、長いあいだ会っていないなかつたんですけど、そのひとがいま、何をしているかわかつたんです」

アヤノは自分の声が自分のものではないように感じていた。どうして初対面の知らない人に自分の思いをここまで話してしまうのだろう。そもそも、そういう質たちではないし、どちらかと云うと、自分の気持ちはどう隠し通すか、そればかり考えてきた。いくら、夢の中であるからとはいえ、なんだか話し方も強くなつていて、これほど強い思

いが自分の中にあつたとは、と自分で自分に驚いた。

おそらく、その強い思いに気づいたことで、ためらいが消えたのだろう。

「だから、もうあと一段——〈二階まであと一段〉を、わたしにください」

「なるほど、わかりました」とイバラギは快くそう答えながら、（夢か）と胸のうちに唱えた。

（ひととき、夢を見たのだ）

自身をなぐさめるように小さく頷いた。さしずめ、自分はまだ階段のいちばん下にいる。〈二階まであと十四段〉の踏み板の上だ。どうせ、二階までいちばん遠いこの一枚は売れのこる。それでいい。自分はまだ夢を見ていて、夢を見ることが自分の店をつくっていく。自分の店は古道具屋であり、古いけれど道具屋であり、その道具が誰かの役に立つことを夢見て商売をつづけていけばいい——。

イバラギは〈二階まであと一段〉に五百円の値をつけ、

「ぜひ、ください」

と、ほとんど目を輝かせているアヤノのために青い包装紙で踏み板を包んだ。腱鞘炎をかばうために、いつもより時間を要したが、きれいに包み終えて、「どうぞ」と手渡した。

アヤノは夢がどこまでも覚めないことが不思議だったが、財布から五百円玉を取り出して、この硬貨一枚で〈二階まであと一段〉を手にすることが出来るのは、やはり（夢だからよね）と青い包装紙に包まれたそれを受けとった。

「ありがとうございます」

「いえ、どうぞまた——」

イバラギは店を出ていくアヤノの背中を見送り、アヤノは外に出ると、胸の前に〈二階まであと一段〉を抱いてただ暗いばかりの空を見上げた。

が、黒と群青色によってまだらに彩られた空を探ると、かろうじて、東の方角に小さな星がひとつだけ出ている。

（ちようどへよつかど）のあるあたりじゃない？）

アヤノはその小さな星を目印にし、あたりを見

まわしてから少し足早に歩き出した。歩くほどに、一歩一歩を踏みしめている実感がみなぎってくる。

(もしかして、これ、夢じゃないのかな)

ようやくそう思った。

だとしたら、市子いちこがいない以上、こんな夜中に自分が身を寄せる場所は(よつかど)を置いて他になく、行き先としては、きつと間違っていない。ただ、じつを云うと下北沢しもきたがわの路地裏から(よつかど)のある片時町かたときまちまでどう歩いたらいいのか、正しい道順を知らなかった。だから、ただひとつ空に出ている星を頼りにし、(とにかく、あの星の下まで行ってみよう)と歩くしかなかった。

その一方で、

(何やってるんだろう、わたし)

と思う気持ちも募ってくる。なにしろ、夜道を歩くのは苦手だし、いつもは市子と電話をつないでいたから気を紛らわせることが出来た。でも、今夜は市子の声もなく、いつもより長い道のりを一人で行こうというのだから、無謀なときわまらない。

(でも、わたしには階段がある——)

アヤノは自分にそう云い聞かせた。

(わたしには、二階まであと一段)がある)

ただし、一枚だけとはいえ、踏み板はけっこうな重さがあり、夜道がどうのこうのよりも、物理的な重量と距離が足腰にこたえた。それに、なしろ暗いのである。

ただ暗いだけではなかった。同じ暗いところでも、何度か通って知っているところと、まるで知らないところを歩くのでは、自分を取り囲む暗さがずいぶんと違っていた。心なしか街灯の数がいつもより少なく感じられ、自分以外はすべて闇やみに沈んでしまったようで、闇の中にただ一本だけのこされた道を歩いているようだった。

さて、そうしてどれくらい歩いたのだろうか——。疲れが全身にのしかかってきて、(やめればよかった)と後悔し始めたところで、ふいに霧が晴れたように路地をぬけ出て大通りに出た。

こんな時間でも車が行き交っている。「片時町」と表示された信号機がおなじみの交差点に青

や赤の光を放っていた。

いつも自転車で来る道とは違う道で辿り着いたので、交差点の角にある（よつかど）の様子がとてもなく違って見えた。なんとというか、小さくて、あぶなつかしくて、それでも踏ん張るようにして店をひらいているのが、なんだか健気けんけいで愛おしく思える。

アヤノは交差点を渡って食堂の前に立ち、控えめに引き戸を引いてそっと中にはいった。誰にも気づかれないよう静かにはいったつもりだったが、カウンターの中にいたキサとフミナが、そっくり同じ驚いた顔ですぐにアヤノの方を見た。それから一拍置いて、テーブルを片づけていたヨリエもやはり同じ顔になり、「どうして？」と三人が示し合わせたように口を揃そろえてアヤノに聞いたのだ。

「今日は休みでしょう？」「なんかあった？」「髪がぼさぼさみたいけど」

「ううん」とアヤノは首を縦に振ったり横に振ったりした。「よくわかんないけど、なんとなく来

ちゃったの」

「惜しかったわねえ」とキサが舌打ちをする。

「十五分くらい前に帰っちゃったんだけどさ、アヤノに会いに来たお客さんがいたのよ」

「わたしに？」とアヤノは抱えていた青い包みを食堂の壁にたてかけて首をかしげた。「誰だろう？ ハルカとか？ まさかね」

「男のひと。ハムエッグ定食をおいしそうに食べてさ、あんたにとって名刺を置いていった。ほら、これ」

「え？」と受けとってアヤノが名刺を見ると、そこに田代たしろの名があつて、瞬間、まわりの音が消えて時間が止まったような気がした。何が起きているのか、すぐにはわからず、ただ名刺を見つめたまま立ち尽くした。

「よかったら、連絡ください——って、そう伝えてほしいって。すごい、いい男じゃないの。誰なのよ、あれ？」

名刺を裏返すと、住所と電話番号が記されている。

(もしかして、やっぱり夢なの?)

(ハムエッグ定食をおいしそうに食べた?)

アヤノは、いま自分の頭上にひとつだけ光っているだろうあの小さな星を想った。

*

(もし)と冬木可奈子は行きつけのバーのカウンター席に座り、ママがつくってくれた好物のレモンサワーを飲みながら、自分の気持ちを整理していた。

もし、今夜が早上がりでなかったら、迷うことなく、松井さんのお誘いに「もちろん行きます」と答えていた。

そうよね? わたし。

だって、松井さんはすごくジェントルマンで感じがよかったし、なにより、電話一本で、どこにでも飛んできてくれるなんて、あんなに嬉しいことはなかった。

ちよつと、痺れた。

それに、一般の相談者にまぎれて電話をしてくるなんて、そして、ちょうどそれにわたしが出でていうのも、確率としてはどれくらいめずらしいことなんだろう？

「運命」と云うのはおおげさかもしれないけれど、「縁がある」とかそれくらいは云つてもいいんじゃないかな。

それに、早上がりじゃなかったら絶対に「もちろん行きます」と答えていたのは、あの食堂がすごくおいしかったからだ。

それとも、あれは松井さんのあのきれいな黒いタクシーに乗って、道すがら松井さんに身の上話を聞いていただき、そのうえで連れて行ってもらったから、おいしく感じたのだろうか――。

いや、それはそれとしてだ。

とにかくおいしかった。もう一度、と云わず、この先、何度でも食べに行きたい。

だから、そうよ、「すみません、今日は行けません」なんてお断りしちゃったのは苦渋の選択だった。

ただ、今夜はこっちのことも気になっていたし――。

「ちよっと、責任も感じてたから」

「そうなの？」とママは可奈子の話を半分は聞き流していた。「それはちよっと違うんじゃないの？突然、その運転手さんからお誘いが来ちゃって、どうしていいかわからなかったんでしよう？こっちのことは、別にアンタがいなくてもいいわけだし――」

「そうなの？」

「そうよ。電話を処分するだけなんだから」

これは確かにママの云うとおりで、ママは店で使ってきたピンク色の電話を、「もう誰も使わなくなつたから、処分しちゃいたいんだけど」と一週間ほど前に可奈子に相談したのだった。

「こういうのって、どこへ連絡したらいいの？ピンク電話ってどこかで引き取ってくれるんじゃないかなつたつけ？方々、訊きいたんだけど、この電話って」と色あせたピンク色の電話を指差し、「前にここでバーをやってたママから引き継いだ

ものなのよ。だから、いろいろわからなくて、どうも、電話機は借りたんじゃなく、変なルートでもらってきたものみたいなんだけどね。とにかく、電話のことだったら、アンタに訊けばわかるんじゃないかと思って——」

「うーん」とそのとき可奈子はひとつ唸り、^{うな}「本当はそんなの知らないよ、って答えたところだけど、たまたま、このあいだ相談室の電話を処分したばかりだから」

「あら、本当に？」

「そう。そしたら、電話の葬儀屋さんみたいな女のひとが引き取りに来てくれて——」

「何それ。面白い」

「うん。彼女に頼んだらいいと思う」

それで可奈子は電話回収屋のモリイズミをママに教え、ママがモリイズミに依頼をした結果、引き取りに来る日が今夜に決まったのだった。そこへ持ってきて、たまたま可奈子が早上がりになり、「わたしも行きますから」と前もってママに約束していたのである。

とはいえ、まさか可奈子が電話を引き取るわけではない。単にモリイズミの連絡先を教えただけなのだから、「責任」は確かに大げさだ。なんら責任など感じる必要はなく、ママには、「用事が出来たので行けなくなつた」と連絡すればそれで済んだ話だつた。それを「責任」などと場違いな言葉を持ち出して松井の誘いを断つたのは、ママの云うとおり、突然のことで動揺し、それはつまり、可奈子自身の思いが定まっていないからだつた。

「何時だっけ」とレモンサワーをあおつてママに訊くと、「もうじきよ」とママはサワーのおかわりを手早くつくつて、カウンターの可奈子の前にコッソリと置いた。

すると、そのコッソリが何かの合図であつたかのように、バーのドアがひらき、

「お邪魔します」

と云つて、回収屋のモリイズミが入ってきた。

「あ」と可奈子は反射的に右手を小さく挙げて会釈をし、モリイズミも「あ」と応え、「相談室

の」と無遠慮に可奈子を指差した。

「今日は喪服じゃないんですね」と可奈子も無遠慮にモリイズミの作業着姿を右から左から眺め、

「よかったら、ちよつと飲んでいきませんか？」

と隣の席を示した。

「いえ、わたしは仕事ですから」

モリイズミは大きく首を振ったのだが、「どうぞ」「だめです」としばらく押し問答がつづき、結局、可奈子の勢いに押されて、「じゃあ、ちよつとだけ」と隣のスツールに腰をおろした。

「冬木さん、だいぶ酔ってますよね」とモリイズミはいきなり容赦ない。「あれ？ 名前、覚えていてくれたんだ」と可奈子は嬉しそうに目を細め、しかし、目を細めるのはモリイズミの指摘どおり酔いがまわってきた証拠だった。

「もしかして」とモリイズミは素早く理解する。

「冬木さんが紹介してくださいませんか」

「そうですね」と可奈子はあるときあまり愛想がよくなかったモリイズミが自分の名前を覚えておいてくれたことが、ことさら嬉しく、調子に乗っ

て、「商売繁盛ですか」と余計なことをつけ加えた。

「いいえ、それほどでも」とモリイズミは首を振る。ママが気をきかして、可奈子が飲んでいるレモンサワーそっくりの「焼酎しやうちゆう抜き」をモリイズミの前にコツンと置いた。すかさず、「乾杯」と可奈子がグラスをぶつけてくる。モリイズミはまづ鼻をきかしてアルコールの有無を確かめ、ママの目くばせをちらりと見て口をつけた。

（これだから、酒場の引き取りは嫌なのよ）

モリイズミは内心そう思ったが、いつもはこんな風に席につくことなどないのに、それがその夜の最後の回収だったせいもあって、「つい気が緩んでしまった」と誰に云い訳するでもなく、小声でそうつぶやいた。

「え？」と可奈子が顔を寄せてくる。

「商売繁盛というほどではないですけど」とモリイズミはグラスをカウンターに戻した。「電話を引き取ってほしい、という依頼は途切れることがないです」

「そうなのね」とママがカウンターの隅にひっそりと置いてあるピンク色の電話を横目で見ていた。「あ、これですね」とモリイズミはママの視線を辿って電話を見つけ、「昔はみんなこれでしたよね」とママや可奈子よりずいぶん歳としが下のはずなのに、感慨深そうにカウンターに頬杖ほおづえについて電話を眺めた。

「なんだか面白いわね」とママは声を落として可奈子とモリイズミを交互に見ていた。「だって、片や毎晩毎晩、誰かと電話でつながるのが仕事で、片や、云ってみれば電話線を断ち切るのが仕事なんだもんね」

「ああ」と可奈子とモリイズミが同じような声で反応した。

「つながりたい人はわかるけどね」とママはモリイズミの方を見て云った。「断ち切りたい人って、どんな感じなの——って、アタシもそのうちの一人なんだけど」

「ええ」とモリイズミは苦笑する。「それはもう、いろいろみたいですけど、詳しい事情はわたしも

よく知りません。ただ、引き取ったときの様子からして、単純に携帯電話があるからもう要らないっていうあっさりした人と、どうも混み入った事情があつて、まだ迷っているけど、みたいな人もいます」

「あえて、やめたいって人もいるわけね？」とママはタバコに火をつけた。

「そうです。連絡を断ちたいからって、はつきり云う人もいます」

「つながりたくないんだ」

「そうみたいです。ただ、つながりたくないっていう単純な話でもなくて、中には、本当は、まだつながりを持っていたいって人もいるみたいです——」

「あ、そうなの」

「ええ。このあいだ回収した人は、はつきりそう云ってました。でも、このままだと次へ進めないから——って」

「次？ なんの次？」

「さあ、なんでしょう——」

(そうなのね)とママとモリイズミの話を横で聞き、可奈子は自分がずつと探してきたジグソーパズルの最後のひとかけらは、(もしかして、これなのかも)と、ふとそう思った。

会いたいからそのまま素直に会ってしまおう人。会いたいけれど、いまは会わないでおこうと思う人。会いたいけれど、会ってはいけなないと決めた人。会いたいけれど、もう二度と会えなくなってしまう人――。

自分自身を振り返っても、相手によって、「会いたい」という思いはさまざまで、現に、今夜も松井さんにまた「会いたい」と思ったけれど、素直に「会おう」という思いがまっすぐにならなかった。それは、決して会いたくないわけではないけれど、いま会ったら自分がどうなってしまうかわからない、と感じたからだだった。

(それに)と可奈子は思う。

自分が会いたくても、向こうが自分と同じ思いを抱いているとは限らない。

レンとは子供のときから強いつながりを感じて

育ってきたけれど、たとえば、「次」という言葉が目の前にあらわれたとき、その言葉をレンと自分がまったく同じように解釈するとは限らない。

彼はパズルを完成させること——一枚の完成された絵をつくりあげることが自分の「次」ではないと思つたのだろう。自分の中にもそういうところがある。完成がこわくなって——でなければ、完成することが急につまらなくなつて、その直前で足踏みをしてしまう。

（次か——）

（出来れば、このままここにいたいけれど——）

可奈子はカウンターの隅のピンク色の電話をそれとなく見ながら子供のように唇を噛んだ。

*

「何なの、それ」とキサが食堂の壁にたてかけられた青い包みを指差し、

「うん」

とアヤノは包みを手にして包装をほどいた。

「衝動買いしちゃったんだけど」

中から出てきた板切れ一枚を覗き込んだ皆に見せたが、キサもフミナもヨリエも「なに、それ」「まな板?」「にしては大きすぎない?」と正体がつかめなかった。

「階段の踏み板なの」

とアヤノが説明しても、

「なに、それ」

と同じ疑問が復唱される。

大きくない? という言葉がいまいちど耳に届いたが、アヤノは食堂のあかりの下であらためて踏み板を確認し、

(小さなものだなあ)

と皆とは違う思いを抱いていた。

もし、自分がいまのほりかけている階段の途中がこの踏み板一枚なのだとしたら、それはあまりにささやかな面積ではない。この一枚が、いまのところの自分の居場所なのかと思うと泣けてくる。いや、泣けてくるけれど、なんだか自分にはちようどいいようにも思え、

(このまま、ここにいたい気もするよね)

と別の思いが頭をもたげていた。

*

(こういう夜もありますよ)と松井は、もう何度その言葉を繰り返しただろう。

いつもより夜がずっと暗く感じられ、そういう夜は東京でもめずらしく星がたくさん見えるものだが、今夜は本当に星さえも姿を見せなかった。

(やはり、世界は滅亡してしまったのだ)と松井は思った。

あの映画のとおりだ。

あの映画もタクシーの運転手が主人公で、客のいない夜に眠気がさしてきて、公園の端に車をとめて仮眠をとる。ほんの小一時間。ふと寒気を感じて目を覚まし、気をとりなおして業務に戻るのだけれど、客がないどころか人の姿がまったくない――。

暗い一本道がつづいていた。

信号機と街灯だけがぼんやりと光り、他に車もなく、学校と墓地と空き地に囲まれていた。

じきに午前四時である。

最初は目の錯覚かと思っただが、東の空に小さな星がひとつだけのぼっているのに気づき、誘われるようにそちらへ向けて車を走らせていると、ポケットの中の携帯電話がくぐもった音をたてた。路肩に停車してポケットから携帯を取り出し、あわてて指がもつれて取り落としそうになったが、両手でしっかりと掴つかんだ。

画面を確認する。

「冬木可奈子」という文字の並びが、小さく震えるように光っていた。